

曹洞宗の人間観—その伝統と今後の展開について—

愛知学院大学教養部 講師 菅原研州

曹洞宗における人間観の研究については、祖師の伝記研究をめぐって、幾つかの成果があった。元々曹洞宗宗学研究所初代研究員であった佐橋法龍は『人間道元』（春秋社、一九七〇年）を著し、里見弴『道元禅師の話』（岩波書店、一九五三年）や竹内道雄『道元』（吉川弘文館人物叢書、一九六二年）の成果を賞賛しつつ、宗学に対して経験科学の導入を強く訴えた。『人間道元』は著作名から敢えて道元への「尊称」を外し、一人の人間として評価しようとするものであり、また心理学を用いて道元及び周辺の人々の性格分析を行った意欲的研究であった。これらは人間観の研究というより、研究対象を一人の人として扱うことを意味するものだった。

しかし、実際に曹洞宗の人間観研究において転機となったのは、一九七九年に米国プリンストンで開催された第三回世界宗教者平和会議における町田宗夫宗務総長（当時）による部落差別発言（通称：町田発言）であった。町田はこの時、会議中に確認された日本の部落差別について否定し、会議記録から削除させようとしたのであった。その後曹洞宗では部落解放同盟から当問題についての対応を求められ、遅い歩みながら研究を進めるに至り、従来の刊行物に見える差別文言を確認し、反人権的な事象への対策を図った。しかしその最中の一九八四年、今度は広島県内曹洞宗寺院住職によって「家系図差別事件（身元調査に関わった事件）」が起きた。この問題の中で解放同盟からは、仏教で説かれる因果や業の問題を含めた「道元禅師の人間観と部落解放」の課題が与えられた。つまり、差別が起きる構造が教義の中に求められるかどうかを探ろうとしたのである。その研究成果として、曹洞宗では通俗的な業論を「悪しき業論」として否定し、その克服を通して仏教者による差別的言説を無くそうとした。また、道元の人間観への研究は改めて石川力山編『道元思想大系20』「道元の人間観」（同朋舎出版、一九九五年）にまとめられ、石川はこの「人間観」の課題を「仏教者、あるいは広く宗教者として、人権擁護や反差別という問題とまともに向き合うための視点・視座を確立する、決定的な要因になる」と述べた。つまり、現代社会が抱える諸問題に、僧侶としてどう向き合うかを探し求めるための視点を提供するものとしたのである。

このような人権問題研究は、啓蒙主義的な人間観を推し進め、その中で従来の伝統を批判的に検討する営みであったとまとめられる。そして、特に石川の指摘に従えば、「人間観」を様々な社会問題に取り組むための基盤として扱ったことは明らかであるが、昨今の社会福祉の現場では啓蒙主義的人間観のみでは対応しきれないとされる。よって、今回の発表はこれまでの曹洞宗の人間観を検討し、その上で今後の展開として、昨今の社会福祉などで求められる人間観に曹洞宗の宗旨・教義が対応可能かを検討したい。

キーワード 曹洞宗 啓蒙主義的人間観 人権問題